ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　走ってから一時間後、汗だくになった雅也とピチュー、リオルは道場の中へと入っていく。汗だくになっても、まだピチューとリオルは元気そうだ。汗を流すために、雅也達は、入口からまっすぐ、突き当たりを右に曲がった所にある風呂場に向かう。

　数分後、シャワーを浴び終えた一人と二匹は、自分達の部屋に向かった。彼等の部屋は、居間の反対側、つまり、風呂場を出てまっすぐ行くと、左側にある。雅也の部屋は、八畳ほどもある広めの部屋だが、拓馬と共同で使っているし、ポケモンもいるため、彼が広いと感じたことはあまりない。勿論、雅也も拓馬も、そしてポケモン達も、そのことで不満に感じることはないが。ちなみに、良助と奈央の部屋は、この向かい側にある。田島辰巳の部屋は、その隣だ。

　軽くノックして、雅也は部屋に入る。部屋に入った彼の目に飛び込んできたのは、上半身裸で大の字に仰向けで寝そべっている所だった。その脇で、拓馬の相棒のチコリータと、イーブイがすやすやと寝息を立てている。誰かが部屋に入ってきたのが分かったのか、拓馬は薄らと目を開けた。

「あぁ……雅也。おかえり」

　眠そうな声と共に、拓馬は起き上がる。

「ただいま。相変わらず、師匠との練習試合の後は眠そうだね……」

「うん。守り重視のスタイルは、結構気を使うんだよね。まぁ、そこが面白いんだけどさ」

　ふわぁあ、と欠伸をして、拓馬は伸びをする。

「その様子じゃ、練習試合が終わったのは……」

「うん、さっき」

「うわぁ……師匠も疲れるんじゃない？」

　勿論そんなことはないことは、雅也も重々承知している。口調も、どこか冗談じみていた。

「疲れたとこでトドメをさすのが、僕達のやり方だから、疲れてくれた方がいいんだけど、師匠達には通用しないんだよね。まぁ、それでも僕等は僕等のやり方を極めるまでだけど」

「がんばれよ。あっ、終わったのがさっきなら、まだシャワー浴びてないよね。今、お風呂空いているよ」

「本当？　ありがとう！」

　そう言うやいなや、拓馬は二匹の相棒を起こして、風呂場へと向かう。部屋には、雅也と、彼の相棒であるピチューとリオルだけが残された。

　これが、彼等、この道場に住む弟子達三人とその相棒の『日常』だ。一緒に鍛え、笑い、助け合い、時には悔し涙を見せ、それでも次の日には元気に共に競い合う。それが彼等にとって、この上なく大切で、幸せな時間だった。

　だが、その『幸せ』なだけの時間は、ここで終わることになる。田島辰巳が感じたことは、実は、ある意味では間違っていた。『雅也と拓馬』を襲うのは、何も『身勝手な大人のやること』だけではなかったのだ。『捨てられたこと』を除けば、その最初の犠牲者は、彼だった。

　この日の夜。皆が夕食を食べている時だ。田島辰巳が、突然言った。

「明日、山に登りに行こうか」

　田島辰巳が『山』と言ったのは、その山の名前を、もう誰も知らないからだ。古い文献を見ても、その名前のところは黒く塗りつぶされていて、誰も読むことは出来ない。新しい名前も考えたようだが、どれもいまいちピンとこないので、結局その山に名前はないままである。

　そんな特殊な山なので、『山』といえばどの山をさすのか、ここら辺に住んでいる人なら誰でも知っている。

　はーい、と元気よく全員が言った。

　部屋に戻る最中の三人である。奈央と田島辰巳は、夕食の後片付けだ。

「何するのかな？」

「あれじゃない？　いつも通り、野生のポケモンとひたすら戦うやつ」

「よっしゃ！　アリゲイツの練習相手にはもってこいだぜ！」

「僕、そろそろ新しいメンバーが欲しいなって思っているんだけど、仲良くなった時のために、モンスターボールいくつか持っていこうかな？」

「えー？　雅也、あそこのポケモンと仲良くなれんのかね？　あいつら、俺達みたらソッコーで襲いかかってくるじゃん？」

「いや、良助、拳をぶつけ合った後に想いが通じることは、往々にしてあることだと、僕は思うな。まぁ、簡単じゃないけどね」

「そうだよ。拓馬の言う通りさ。あの山に行くのは、これでもう三回目なんだし、そろそろ通じる……はず！」

　なんてことを、三人は楽しそうに話していた。

　こうして、何事もなく、日付は変わる。

　そして、その日がやってきた。全てが変わりはじめる、その日が。